見る聞く考えるやってみる授業 —— ㉜

水沢自慢ビデオ番組づくり
——子どもたちが発信する水沢

岩手県奥州市立水沢小学校教諭 佐藤正寿

自慢ビデオ番組づくりの着想

「情報を発信する側に立つ」……これが単元「水沢の自慢ビデオ番組をつくろう」の出発点である。子どもたちは、圧倒的にメディアから情報を受信する立場にある。そこで、違った視点からメディアの見方や考え方を深める学習を行いたいと考えた。

そのために選んだのが、ビデオ番組づくりである。この良さはたくさんある。まず、子どもたちがイメージしやすいこと、必要な情報を取捨選択しなければいけないこと等々。「やってみたい」と思う子どもたちの喜ぶ姿が想像できた。

次に対象である。番組づくりのポイントの一つに「取材」がある。小学校5年生であれば、「人」に直接取材するのがよい。しかも自分たちの地域の人に。何度も取材が可能であるし、何よりも一連の活動を通じて、地域への愛着も育つであろう。

このような意図から、2005年度の5年生の総合的な学習の時間で「水沢の自慢ビデオ番組をつくろう」の単元構想を考えた［資料1参照］。

授業「水沢の自慢ビデオ番組をつくろう」（小学校5年生対象）

「1」「水沢の自慢ビデオ番組をつくりたい！」

単元導入の授業。ポイントは「ビデオ番組づくりをしたい！」という意欲を子どもたちに持たせることである。最初に水沢で自慢できることを発表させた。「高野長英などの偉人が多い」「日高火防祭が有名」といった子どもたちなりの自慢が出てきた。そこで、「水沢は有名かどうか」と聞いたら、圧倒的に「それほど有名ではない」という答え。しかも数ヵ月後の2006年2月には「水沢市」という地名は合併により「奥州市」となる。そこで、子どもたちの間から「ぜひ水沢市を有名にしたい」という思いが出てきた。

「2」張り切って取材、キャッチコピーが決定

子どもたちは5班に分かれて、パンフレットやインターネットのホームページから自慢となる取材対象を決めた。実際の取材は時間が限られている。何とか有意義な時間にしたい。そのためには、事前の取材計画が重要である。子どもたちは取材の役割分担を決め、質問内容を吟味し、そして取材練習を重ねて取材をした。事前の学習が功を奏し、価値のある情報を得ることができた。

その情報をもとにキャッチコピーづくり。番組をつくるときに一番大切なのは、「伝えたいこと」を明確にすることで、キャッチコピーづくりはそのための方法の一つだ。「付箋紙に思いつくキーワードを書く」「使いたいキーワードをいくつか選ぶ」「並びかえたり、一部修正したりしてキャッチコピーをつくる」という手順で行った。方法が分かれば子どもたちは意欲的に活動に取り組む。その結果、満足のいくキャッチコピーができた［資料2参照］。

「3」撮影計画づくり、そしてプロに学ぶ

次はいよいよ撮影計画づくりである。キャッチコピーをもとに、番組づくりをする。サンプルとして他校の例を見る。そこでは、劇化したり、ドキュメンタリー風にしたりと実際のテレビ番組を参考に多くの工夫がなされていた。子どもたちも「こういう工夫なら得意だ」と張り切ってシナリオをつくった。

そうは言っても初めての番組づくりである。工夫すべき点が多く残っていた。そこで、地元ケーブルテレビのディレクターにシナリオを実際に見てもらった。プロの鋭い指摘に、子どもたちは「初めて見る人の立場で分かりやすいものをつくることが大事」であることを学んだ。シナリオを修正し、いよいよ撮影である。

「4」現場での撮影

入念な役割分担、そして何度もリハーサルを行って、いよいよ現場での撮影である。地元の武家住宅資料館で館長さんに出演してもらったり、子どもたち自身がお菓子屋さんで試食をして「おいしい！　こんなの食べたことがない！」と演技したりと、子どもたちは大奮闘だった。番組は子どもたちにとって満足のいくものとなった。作品鑑賞会はお互いのグループの良さを認め合う場となった［資料3参照］。

子どもたちが学習で得たもの

■いろいろなスキルが伸びた→ビデオ撮影スキル、インタビュースキルなど、子どもたちが伸ばしたスキルは数多い。

■人との関わり方を深めることができた→子どもたちは取材対象者、プロのディレクターなど多くの人々のお世話になった。番組をつくることの大変さを学んだ。

■地域への愛着を深めることができた→水沢の自慢を調べていくうちに今まで知らなかった水沢を知ることができた。これに

より地域への愛着を自然に深めることになった。

■メディアの見方を以前より深めることができた→番組づくりを体験したことで、子どもたちが発信者の視点を学ぶことができた。それはメディアの見方を深めることとなった。

「ビデオ番組づくり」という一つの学習活動から、子どもたちは実に多くのことを学んだ。今年度、同じ子たちを6年生で担任している。発信活動をさらに発展させていきたいと考えている。

■資料1：単元計画 ［計24時間］

1. 水沢の自慢ビデオ番組をつくる計画の見通しを立てる［1時間］
2. 水沢の自慢について、資料・インターネットを使って調べる［3時間］
3. 自慢の対象について決め、取材の計画を立てる［2時間］
4. 対象を取材し、キャッチコピーをつくる［3時間］
5. 番組づくりの計画を立てる（シナリオづくり、撮影分担、練習等）［4時間］
6. 撮影内容について、プロに批評してもらう［2時間］
7. シナリオを修正、撮影の準備をする［2時間］
8. 撮影を行い、編集する［5時間］
9. 番組鑑賞会を行い、学習を振り返る［2時間］

■資料2：取材対象とできたキャッチコピー

班	対象	キャッチコピー
1班	後藤屋（老舗のお菓子屋）	季節を感じる手づくりの味
2班	武家屋敷（資料館も活用）	歴史がいろいろ、武家屋敷
3班	日高神社（由緒ある神社）	樹齢900年、文化がある神社！
4班	及川家（文化財）	謎がたくさん！　及川家の深い歴史！
5班	青い目の人形★注	戦争を乗り越えた青い目の人形

★注：80年近く前にアメリカから日本各地の学校に贈られた人形。ほとんどが戦争中に焼却されたり捨てられたりしたが、水沢では水沢幼稚園に1体保存されている。

■資料3：後藤屋さんの番組

1 教室で「お腹がすいたね」「何かおいしいものが食べたいね」とやりとりする男の子と女の子。「いい所知っているよ」と、急にジャンプして……。

2 お菓子の後藤屋の前にワープ。お店のご主人が登場。「いつからお菓子をつくっているんですか」「どんな気持ちでつくっているんですか」とさっそくナビゲーター役の女の子がインタビュー。

3 店に入って、「わー、たくさんお菓子がある！」と驚く。女の子が一つひとつのお菓子について聞く。お勧めのお菓子なども聞く。「今の季節はこれがよく売れるんですよ」と和菓子を見せてもらう。カメラマンはさっそくアップで撮影。

4 お菓子づくりの作業場に入る。一つひとつ気持ちを込めて手作業でつくっている。「何をつくっているんですか」「一番の喜びは何ですか」などと次々にインタビュー。「やっぱりみんなが おいしいと言ってくれた時かな」ということばに納得。

5 実際におまんじゅうを女の子が食べてみる。「おいしい！　こんなの食べたことがない！」と思わずことばが出てくる。

6 お店の前でみんなで声を揃えてキャッチコピーを言って終える。「季節を感じる手づくりの味！」

■子どもたちの感想

最初に番組をつくることを決めたときは簡単と思ったけど、シナリオを考えたり、取材したり、撮影したりするのは大変でした。でも、とっても楽しかったし、水沢の自慢を伝えることができてよかったです。

くわしく調べると、まだまだたくさんの秘密が水沢にはあることが分かりました。撮影するにはたいへんな時間が必要だということも分かりました。どのチームも水沢の自慢をいっぱい伝えられたと思うし、水沢が有名になるといいなと思いました。

この番組の感想は、初めてマイクやカメラを使って本格的にやったので緊張したけれど、やっているうちにぜんぜん緊張しなくなって楽しい！　と思えるようになったのでよかったです。苦労したところはセリフを覚えるところです。作品をつくってから、テレビ番組の見方も変わってきました。

スタッフあってこその番組。
カメラマンとセリフ係。

後藤屋さんでの
インタビューシーンの撮影。